

平成20年度企画展

小川未明と相馬御風

(平成20年10月10日～11月16日)

「日本のアンデルセン」と称される児童文学者・小川未明。そして、詩歌や評論、良寛研究など多彩に活躍した相馬御風。ともに新潟県上越地方の出身で、中学・大学の同窓生、共通の師に教えを受けた二人の親交は、約半世紀にもおよびます。

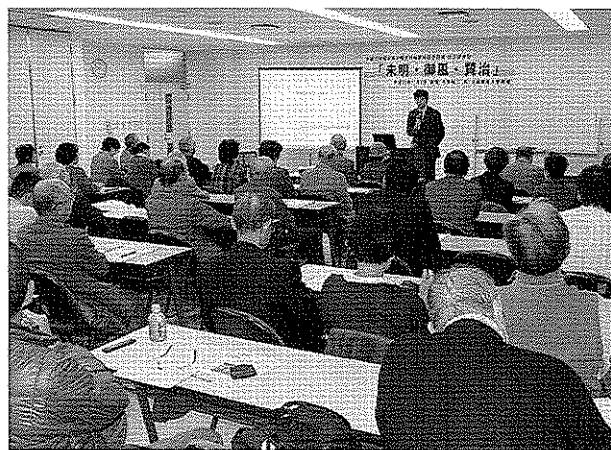
今回の企画展では、未明と御風の交流の足跡を「文学の芽生え(少年期)」 「文学界への飛翔(青年期)」 「それぞれの転機(中年期)」 「変わらぬ友情(中年期以降)」 の4つに分け、書簡や作品など約140点の資料を展示しました。

期間中の11月9日には、上越教育大学の小笠裕二教授を講師に迎えて記念講演会「未明・御風・賢治」を開催。小川未明、相馬御風、宮沢賢治の意外な共通点などについて、作品の解説等を交えて具体的にお話ししていただきました。

注目 文学の芽生え

二人の文学の基礎がはぐくまれた高田中学校(現新潟県立高田高等学校)時代を少し紹介します。

明治28年に入学した未明は、漢文教師の江坂香堂、北澤乾堂に漢詩を学び、



記念講演会の様子 (H20.11.9)

「越声」「白洲」と号して創作活動に励み、修養会の機関誌や雑誌「中学世界」などに作品を発表しました。

授業では、嫌いな理数系の教科を放棄したために落第し、中退してしまいます。後年、未明は自伝で、「故郷の学校生活に対して憤怒と屈辱の念を禁じ得ない」と振り返っています。

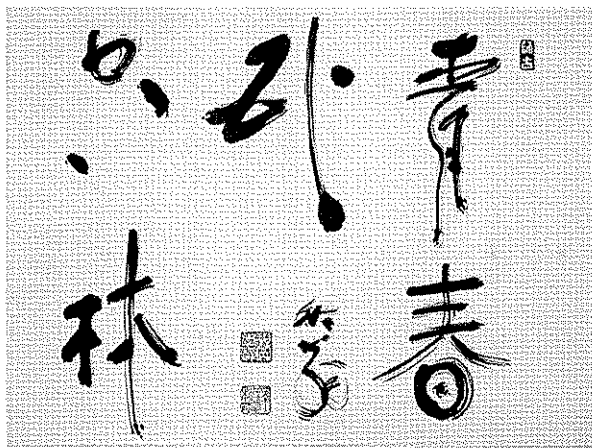
一方、未明より一歳年下の御風は翌29年に高田中学校に入学。三年生のときに下宿した庄田家では、家主の直道から「徹底した古武士的訓育を受け、心身に剛気精悍な気風」を培いました。また、文芸部では助手を務め、国語教師の下村千別から短歌の指導を受け号も「窓竹」から「御風」に変わり、作歌活動に熱中していきます。

木村秋雨没後20年展

糸魚川ゆかりの俳諧研究家・木村秋雨の没後20年を記念する展覧会を二部構成で開きました。

第一部は、企画展「小川未明と相馬御風」と同期間に開催。秋雨の生涯や収集資料、相馬御風・会津八一との交流などを中心に紹介しました。

第二部(平成20年11月21日～平成21年3月15日)では、「秋雨の書と心」をテーマに、掛軸や色紙、短冊など自筆作品を多数展示。秋雨の人物を物語るエピソードを紹介しながら、自由奔放で勢いのある筆跡を、多くの方々に味わっていただきました。



木村秋雨書「青春臥空林」

解説 木村秋雨のプロフィール

僧侶、俳諧研究家、茶人、書家。

新潟県中頸城郡三郷村(現上越市)出身、明治39年生まれ、昭和63年没。相馬御風や会津八一に教えを受け、文芸探求に生涯をささげました。世間体を気にせず、自由気ままに生きる姿は、「昭和の良寛さま」とも呼ばれています。

秋雨が収集した九千点にもおよぶ資料は昭和56年、御風との縁などから当市に寄贈していただきました。中でも、俳諧資料は質量ともに充実しており、全国の研究者から注目されています。



能生・青海地域移動展覧会 相馬御風展

市内の能生地域(旧能生町)、青海地域(旧青海町)のみならずから、御風をより深く知っていただくため、各地域で移動展覧会を開きました。

スペースや資料管理の関係から、数多く出品することはできませんでしたが、各地域に関わり深い御風資料を選んで展示しました。